

[日本の陶磁展によせて]

新収の鹿背山焼、中川利三郎作、染付花鳥山水文水指

今春、当館の日本陶磁コレクションに新に加わった「鹿背山焼、染付花鳥山水文水指」が、このたびの「日本の陶磁展」で初公開されますのを機に、解説させていただきます。

鹿背山焼は京都府の最南端で、奈良県と境界を接する相楽郡木津町の鹿背山で、江戸の後期から明治の末頃に掛けて焼成された磁器です。鹿背山は大和文華館からも近く、車で30分あれば十分に行けるところです。江戸後期の文政10年(1827)、鹿背山村の森本助左衛門によって良土が発見され、大和国五条村(赤膚山)の陶工を雇って製陶したのがその始まりだと伝えられています。およそ80年の歴史をもっていますが、その創業から43年間にわたって本格的な磁器窯を導入し、染付や祥瑞写しの最上手品を焼造して、その基礎を確立したのは一条家領時代であったといえます。

ここに紹介する水指も祥瑞写しですが、高さ18.0cm、口径16.9cm、底径18.4cmで、わずかに青味を帯びた透明釉が厚くかかっています。堅緻で上質な白磁胎です。底径が口径よりやや広く、わずかに口がすぼんだ形ですが、全体は太い竹筒を象っています。口は一重で、

晩年の芝川百々翁



胴部は胴緒の細い凸線によって、ほぼ真中で上下に二分されています。文様はすべて染付だけで表わしており、口縁部には五弁花と輪違紋を散らした流水文様をめぐらしています。

胴部の上半分は松・竹・梅・桃・菊・椿・牡丹などの花木に、太湖石・叭々鳥・鷺・兎・蜂・流雲などを描き加えて、ほとんど余白を残さないほどにびっしりと表わしています。胴部の下半分は山水文様を細かにぐるりと描いています。

裾脇の部分は白抜きで丸形内に「福」と「壽」の二字を書き入れ、それを上下・左右とも交互に並べた文様帯になっています。これらの染付文様は処々に呉須のにじみ流れ・こげ等が見られますが、その発色は澄んだ美しい青色を呈しています。

底裏にはその中央部に染付で僅に三字三行の銘文「於城南 鹿背山 雲洞製」が書かれています。この銘文中の「雲洞」とは中川利三郎という人物の雅号で、いうまでもなく、この水指の作者です。雲洞利三郎とも称しますが、雲洞は鹿背山焼の中興の祖とも言うべき人です。ここで雲洞という人物を『一條家領鹿背山焼 春田明著』(平成5年刊)によって少し詳しく説明いたします。雲洞、こと利三郎は金沢出身で、京都において漆器業を営んでいた中川重次郎の二男として文政6年(1823)に生まれました。父から蒔絵を習い、やがて雲洞と号して蒔絵師として独立しましたが、間もなく知人の銅版絵師、神楽万平に誘われて、陶業に転じてしまいました。

神楽万平は天保年間恐らく日本で最初の腐蝕銅版転写法によって銅版に書画を彫刻し、それで陶磁器に染付文様を施す技術を発明していました。利三郎は万平と協力して天保11年に京焼の五条坂窯



鹿背山焼、染付花鳥山水文水指

で日本製銅版染付の創製に成功し、その後、領主一条家から許可をもらい、京都の豪商、榊屋吉田茂左衛門を共同経営者として、弘化2年(1845)、鹿背山に築窯し、本格的な焼造に乗り出したのです。窯元は榊屋で、京都より岩井屋道仙という陶工を呼んで築窯し、操業を始めますが、思うような製品が出来ずやがて苦境に陥りました。その2年後の弘化4年(1847)に窯の建直しのため中川利三郎が吉田窯を継承し、道仙を解雇し、江州彦根の陶工佐吉と計って、京都から加賀の若杉村出身の陶工、小川文助を招いて、新に九間丸窯を造らせました。それ以後は利三郎の経営の才も大いに効を發して順調に営業が伸びましたが、嘉永4年(1851)に大阪の得意先である唐物問屋、百足屋、芝川新助に懇望され、思案のあげく、芝川家に入婿することになりました。

それは、5・6年間は芝川の商業の傍ら、鹿背山の製陶業を兼営するという条件付で、窯元はもとの榊屋吉田茂左衛門に返環しました。その後、吉田窯は安政大地震の被害もあって、次第に経営が行きづまり、安政3年(1856)頃には絶えてしまったようです。

一方、芝川家での利三郎は29歳で長女きぬと夫婦となり、家業は盛んとなりましたが、家には世継ぎがあったので、分家して名も百足屋又右衛門と改め、百々^{ひゃくはやく}と号しました。嘉永5年(1852)には独



同(底裏の銘文)

立して唐小問物商を伏見町心齋橋筋に開き、初代芝川又右衛門となりました。又右衛門は唐物商人としても大いに才を發揮し、長崎交易で大いに活躍し、新に組織された大坂神戸両所の本商人総代となりました。さらに、神戸洋銀引替所を設けるなど、芝川家に隆盛をもたらしました。

明治6年(1873)、家督を又次郎(二代又右衛門)に譲り、隠居して又平と改名しました。百々又平は大坂商法会議所(商工会議所の前身)の設立に尽し、初代理事、堂島米会所頭取などの公職を務めるかたわら、私企業の魁ともいえるべき大阪紡織、大阪電燈などに関係し、大阪財界人として重きをなしました。

晩年の芝川百々は南画をたしなみ、田能村直入の画風を慕って入門、また後援者として長く交遊を深めました。また、百々は昔とった杵杵かで陶芸と蒔絵を楽しむなど、悠々自適の生活を送り、大正元年(1912)12月、享年90の天寿をまっとうしました。

京都の蒔絵師から鹿背山の窯元、兼陶工、そして大阪の商人、終には大阪財界の重鎮というような劇的ともいえる生涯を送った中川利三郎こと雲洞、改め芝川又右衛門こと百々、あるいは又平という人物によって作られたこの祥瑞写しの名品、実物をもう一度ゆっくり眺めてみようではありませんか。

(吉田宏志)

季刊 美のたより No.108

平成6年8月18日

発行 大和文華館